

輸入検疫で発見された主な重要病害虫

2000年に輸入された植物から発見された主な重要病害虫は下表のとおりである。これらの病害虫の多くは携帯品で持ち込まれた輸入禁止生果実から発見されている。また、輸入禁止対象及び特定重要病害虫以外でも、タイ産トウガラシ生果実

等10カ国4種類からマレーシアミバエ (85件)、アメリカ産レタス等4カ国10種類からレタスハモグリバエ (79件) 及びタイ産サボジラ等4カ国9種類からセグロモミバエ (34件) 等侵入を警戒している害虫も数多く発見されている。

	発見病害虫名	寄主植物別発見回数	輸出国別発見回数
輸入禁止対象病害虫	<i>Bactrocera cucurbitae</i> ウリミバエ (7件)	ササゲ(1) トカドヘチマ(1) トマト(1) ニガウリ(4)	タイ(3) フィリピン(3) 台湾(1)
	<i>Bactrocera dorsalis</i> species complex ミカンコミバエ種群 (148件)	マンゴウ(57) バンジロウ(20) レンブ(18) トウガラシ(11) レイシ(9) バンレイシ(7) リュウガン(4) その他17種類(22)	フィリピン(39) タイ(37) 台湾(28) インドネシア(14) ベトナム(6) マレーシア(4) その他8ヶ国(20)
	<i>Bactrocera tryoni</i> クインスランドミバエ (2件)	オレンジ(1) チェリモア(1)	オーストラリア(2)
	<i>Ceratitidis capitata</i> チチュウカイミバエ (3件)	アセロラ(1) バンジロウ(1) マンゴウ(1)	ブラジル(3)
	<i>Cydia pomonella</i> コドリガ (1件)	クルミ(1)	イラン(1)
	<i>Cylas formicarius</i> アリモドクソウムシ (3件)	サツマイモ(2) レタス(1)*	台湾(2) フィリピン(1)
特定重要病害虫	<i>Aleurocanthus woglumi</i> ミカンクワトグコナジラミ (7件)	スワンギ生葉(7)	タイ(7)
	<i>Conotrachelus nenuphar</i> スモモソウムシ (1件)	ブルーベリー(1)	アメリカ(1)
	<i>Dendroctonus ponderosae</i> アメリカマツノキイムシ (2件)	ホホワイトバイン材(2)	アメリカ(2)
	<i>Diabrotica undecimpunctata</i> ジュウイチホシウリハムシ (6件)	カラシナ(2) タチチシャ(2) コエンドロ(1) レタス(1)	アメリカ(6)
	<i>Otiorynchus sulcatus</i> キンケクチフトソウムシ (10件)	Sempervivum属苗(3) Potentilla属苗(3) Gaultheria属苗(2) アジサイ切枝(1) エリカ属(1)	オランダ(6) ドイツ(3) イタリア(1)
	<i>Panthomorus cervinus</i> フラワーバラソウムシ (3件)	マンダリン(2) オレンジ(1)	ニュージーランド(2) アメリカ(1)
	<i>Zabrotes subfasciatus</i> ブラジルマメソウムシ (3件)	インゲンマメ(3)	インド(3)
	<i>Omphisa anastomosalis</i> サツマイモノメイガ (1件)	サツマイモ(1)	タイ(1)
	<i>Xiphinema index</i> ブドウオオハリセンチュウ (1件)	イチジク(1)	フランス(1)

*: 本来の寄主植物ではなく、ヒッチハイクとして発見されたものである。

海外のニュース マツノザイセンチュウ、ポルトガルに新発生

マツ枯れの病原線虫であるマツノザイセンチュウ (*Bursaphelenchus xylophilus*) が、1999年にヨーロッパでは初めてポルトガルにおいて発生が確認されたので概況を紹介する。本線虫の分布地域は、これまでアメリカ、カナダ、中国、台湾、韓国、日本などであった。本線虫の発生が確認されたのは首都リスボンの南東約30kmに位置するSetubal地域で、2箇所の海岸松の樹木内から高密度の本線虫が検出された。これまでヨーロッパの針葉樹からは、25種類の *Bursaphelenchus* 属線虫が確認されているが、この中には本線虫に形態が非常に似ているニセマツノザイセンチュウ (*B. mucronatus*) が含まれている。ヨーロッパ諸国では、以前から本線虫の発生を警戒していたが、1996年から開始された本格的な調査で、その発生が確認されたものである。

本線虫と他の *Bursaphelenchus* 属線虫との形態的な識別点としては、①雌の尾端部、②雄成虫の交接刺、③雌成虫の陰門唇 (Valval lip) などの形態が挙げられるが、今回ポルトガルで発

見された線虫は本種の形態的特徴と一致していた。また、DNA分析法 (DNA-RFLP法) に基づいて、アメリカ産のマツノザイセンチュウ及びドイツ産のニセマツノザイセンチュウを本線虫と比較した結果、アメリカ産マツノザイセンチュウと一致した。

同国は、発生調査の結果に基づいて、発生地域を指定し、その周辺に20km幅の緩衝地区を設置して木材の検疫規制を実施している。発生地域においては被害樹木は全て焼却し、病徴の現れていない木材やこん包材についても、移動前の消毒 (熱処理、薬剤の加圧注入又はくん蒸) を義務づけるなど、本線虫の根絶と蔓延防止に努めているところである。

Nematology (1999) Vol.1 7-8.

発行所 横浜植物防疫所
〒231-0003 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045) 211-7155

発行人 森田 健二
編集責任者 江口 寛明
印刷所 内村印刷株式会社